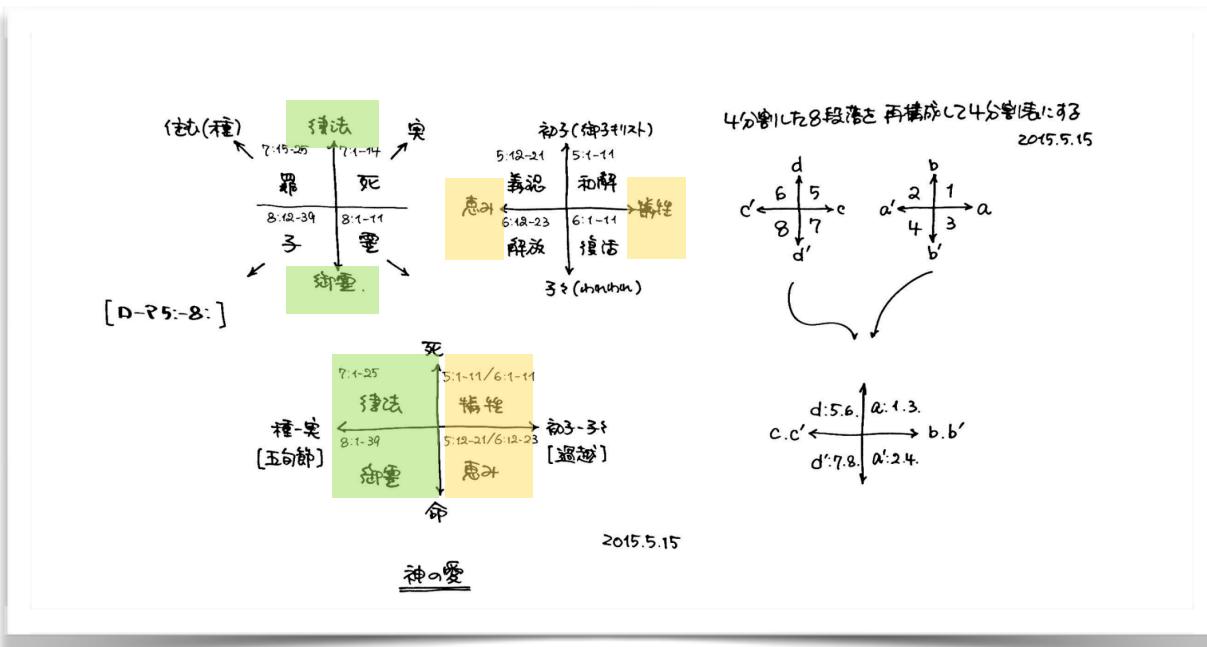




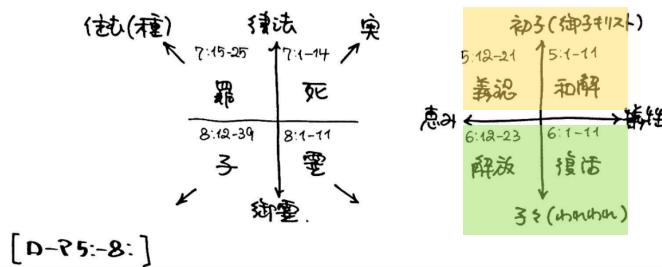
## ローマ人への手紙の構造 5章～8章



ローマ人への手紙5章から8章。神の愛の段落ということで分析していたところです。4つに分けて見ることができると思うのですけど、その4つに分けるところが、5、6章と7、8章で分け方が違っています。5章から6章を分けた4つの分析と、7章から8章を分けた4つの分析が、形が見ると違っています。

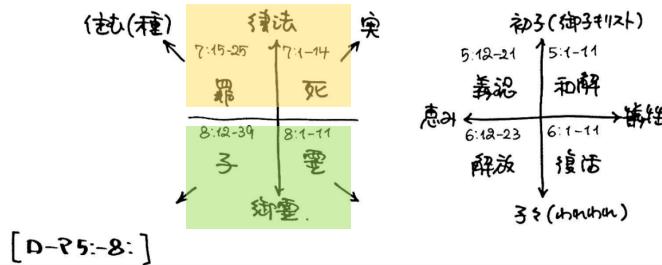
5章、6章のほうはABAB。犠牲、恵み、犠牲、恵みというのがこの中では一番大きな違いになっているということでした。7章8章のほうは、前半は律法、後半は御靈というのも大きな違いになっていたでしょうということでした。

この下の図です。4つに分けたときに、犠牲、恵み、律法、御靈という4段落なのですが、5章のほうは、5:1-11と6:1-11、5:12-21と6:12-23という組み合わせで、5章6章7章8章という4つではなくて、5aと6a、5bと6b、そして、7章と8章というように分けられるのだろうと思います。ですので、5章から8章を4つの段落に分けているように見えますけれども、書かれている順番で4つに分けているわけではないというのを理解してください。



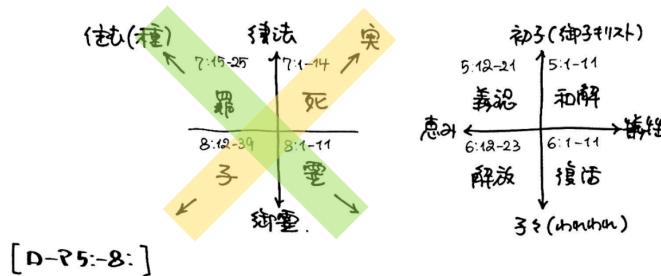
[口-25-8:]

その元になっているのが、上の図です。5章と6章、和解、義と認められること、復活、解放と頑張って短くしました。前半、後半の共通点は何だろうということで見てみましたが、前半は、御子イエス・キリスト、初子の死と復活、そして義と認められること、罪に対しての勝利。それと後半は、そのキリストの初子としての働きが、我々キリストを信じる者たちに転化されるというところで、復活と解放というように見ているので、その初子と子とされている者たちという平行が前半と後半、5章と6章の違いかなというように見ました。そうすると、初子が犠牲になって和解とされるというのが、5:1-11。5:12-21は、その初子が死ぬことによって義と認められるという恵みについて書いてあること。6:1-11を見ると、初子が犠牲になって、私たちがよみがえる。そして、子どもとされていくということ。そして、私たちは恵みによって解放されるので、義の奴隸とされるということが、4つに分けた時の意味になると思います。

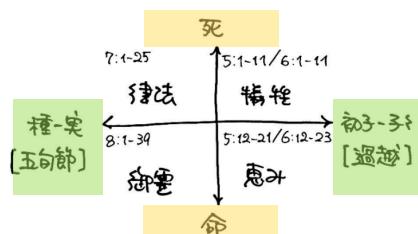


[口-25-8:]

7章と8章は、長い、短い、短い、長いという段落があったのですよね。律法の中に2つ。律法の結果どうなるのかということと、その律法の話をするときに、肉のうちに善が住んでいない、罪が住みついているというのが7章です。8章の出だしは、罪の代わりに御靈が住んでいるということ。それで、その結果私たちはその御靈の初穂をいただいているので、私たちは子どもとされるのだ、子どもなので、御靈が与えられているのだというようなことが8章の後半に書いてあります。



善が住んでいない、罪が住んでいる、御靈が住んでいるというような言い方をすると、私たちが畑のような感じです。その種が植えつけられて結果として実を結ぶ。罪の種が蒔かれると死を生み出す。御靈が住むならば子とされるということがクロスしています。種に対して実の話、律法と御靈という4つの分類です。ここは、書かれている順番で4つの段落に分かれていると思います。ただ、長さは長くて短い、短くて長いですから、クロスの部分も強調されているということで、それを合わせたのがまた、下の図に戻って見てみると、犠牲と恵みと律法と御靈です。



では、犠牲と律法のところと、恵みと御靈のところでは、何か共通点がありそうだというので見てみると、5章の前半、6章の前半と7章、こちらは死。5章の後半と6章の後半と8章はいのちというものが共通になっているかと思います。

5章と6章は、初子が成してくださったことが子らに及ぶ。これが過越の成就ということです。過越の出来事というのは、初子についての裁きが来て、その裁きによって子らが解放されることです。7章と8章は、律法と御靈の話で、種が実を結ぶ。実を結んだ初穂の祭りから始まる五旬節の祭りです。収穫の祭りが五旬節です。こちらは、旧約時代は律法が与えられる。シナイ山の上で律法が与えられることを五旬節で祝い、新しい時代は、御靈が与えられる五旬節を祝うという同じ神様からの祝福なのですけれども、それが古い時代は死を生み出し、新しい時代はいのちを生み出す五旬節であるということです。

過越と五旬節の神様の働きによって、死からいのちに導かれているというのが、神の愛である。そこに神の愛があらわされているというのが、5章から8章までの全体の概略とテーマになると思います。